怪しの館

国枝史郎

一

ここは浅草の奥山である。そこに一軒の料理屋があった。その奥まった一室である。

四人の武士が話している。

夜である。初夏の宵だ。

「どうでも誘拐（かどわか）す必要がある」

こういったのは三十年輩の、いやらしいほどの美男の武士で、寺侍かとも思われる。俳優といってもよさそうである。衣裳も持ち物も立派である。が、寺侍でも俳優でもなく、どうやら裕福の浪人らしい。

「どうして誘拐いたしましょう？」
こうきいたのは三十二、三の武士で、これは貧しい浪人らしい。左の小指が一本ない。はたしあいにでもまけて切られたのだろう。全体が卑しく物ほしそうである。
「そこはお前達工夫をするさ」
美男の武士はそっけない。
「どうしたものかの？」
と小指のない武士は、一人の武士へ話しかけた。誘拐の相談をしたのである。
「さればさ」

といったのは、二十八、九の、これも貧しげで物ほしそうで、そうして卑しげな浪人であったが、頤にやけどのあとがあった。「姿をやつして立ち廻り、外へ出たところをさらうがよかろう」

「駄目だ、駄目」

と抑えたのは例の美男の武士であった。

「期限があるのだ、誘拐の期限が。それを過ごすと無駄になる。外へ出たところをさらうなどと、悠長なことはしていられない。今夜だ、今夜だ、今夜のうちにさらえ」

「では」

といったのはもう一人の武士で、四十がらみで薄あばたがあり、やはり同じく浪人と見え、衣裳も大小もみすぼらしい。

「ではともかくも姿をやつし、屋敷の門前を徘徊し、様子を計って忍び込み、何んとか玉を引き上げましょう」

「それがよかろう。ぜひに頼む」――美男の武士はうなずいた。「しかし一方潜入の方も、間違いないように手配りをな」

「この方がかえって楽でござる」こういったのはやけどのある武士で、「人殺し商売は慣れておりますから

な」
「それにさ」と今度は薄あばたのある武士が、「敵には防備もないそうで」
「うん」といったは美男の武士である。「それに相手そのものが、一向腕ききではないのだからの」
「とはいえ聡明な人物とか、どんな素晴らしい用心を、いたしておるかもしれませんな」
やけどのあとのある武士である。
「そうだそうだ、それは判らぬ」美男の武士は合槌をうった。「で、十分いい含めてな」
「よろしゅうござる。大丈夫でござる。……島路、大

里、矢田、小泉、これらの手合いへも申し含めましょう。……いや実際あの連中と来ては、飯より人殺しが好物なので」
「それはそうと花垣殿」ニヤニヤ笑いながら美男の武士へ、こういったのは薄あばたのある武士、「報酬に間違いはありますまいな」
するとと花垣と呼ばれた武士は——その名は志津馬というのであったが、さも呑み込んだというように、ポンとばかりに胸を打った。「大丈夫だよ、安心するがいい」
「これはそうなくてはなりますまいて。濡れ手で粟の

つかみ取り――という次第でございますからな」

「その代わりこいつが失敗すると」花垣志津馬不安そうである。「あべこべに相手にしてやられる」

「だからわれわれを鞭撻し、十分にお働かせなさるがよろしい」ちょっと凄味を見せたのは、指の欠けている武士であった。

「というのはどういう意味なのかな？」

ちゃアんと分っておりながら、知らないように志津馬がいう。

「いただきたいもので、前祝いを」

「酒はさっきから飲んでいるではないか」

こういいながら花垣志津馬は飲み散らした杯盤を眺めやった。
と、ハッハッという笑声が、三人の口から同時に出た。
「酒も黄金の色ではあるが、ちと、その、どうも水っぽくてな」
「チャリンチャリンと音のするやつを」
「なんだなんだ、金がほしいのか」
今気がついたというように、花垣志津馬は苦笑したが、
「持ってけ持ってけ。……分けろ分けろ」

「これは莫大……」
「十両ずつかな」
「後へ二十両残りそうだ」
「うん、しめて五十両か」
安浪人め、三人ながら、手を延ばすとあわてててひっ、つかんだが、ちょうどこの頃一軒の屋敷の、一つの部屋で一人の武士が誰にともなく話しかけている。

二

「みんなお前が悪いのだ。俺は怨む、お前を怨む。ま

たある意味では憐れんでもいる。……嫉妬！　そうだ、その嫉妬が、一切お前を眩ませたのだ。そのくせどうだ、お前自身は？　好色そのもののような生活だったではないか！　俺は随分我慢した。最後まで我慢したといってもいい。そうしていまだに我慢している。……永い間の受難だった。いや、いまだに受難なのだ。俺ばかりではない。娘もだ！　それをさえお前は餌にした。嫉妬の餌に！　お前の嫉妬！　……だが俺は守って来た、お前の意志を守って来た！　もちろん素晴らしい財産の、継承のためには相違ないが、それより一層俺としては、娘の幸福を願ったからだ。という

とお前はいうかもしれない、『その娘が！』『その娘が！』と！　……が、俺はハッキリという、娘は要するに娘だと！　それ以外には意味はない！　それへ疑がいをかけるとは！　それでも母か！　それでも妻か！　……もちろん、彼女はよい娘だ。愛すべき娘には相違ない。で俺は愛したのだ。だがその愛は純なものだ。お前が『あいつ』を愛したそれと、どうして比較出来るものか！　『あいつ』は実に悪人だ。『あいつ』はその後手を変え、品を変え、我々二人を迫害した。そうして今でも迫害している。で、安穏はなかったのだ！　しかしとうとう漕ぎ付けた。今日という日まで

漕ぎ付けた。今夜さえ過ごせばもうよかろう。勝利はこっちのものになる。そうしたら俺達は自由になる。お前の意志から解放される。明るい日の目も見られるだろう。……それにしても俺は忘れない。俺達を縛った四ヵ条を！　あれは普通の人間には考えも及ばぬ残酷なものだ。巧妙なものといってもいい。……破壊(こわ)せばいくらでも破壊される！　手間暇もいらず簡単に、しかも何らの非難も受けず——ところが俺には出来なかった。そういうことの出来ないように、いつか『慣らされ』てしまったからだ。それをお前は知っていた。そこでそいつへ付け込んだのだ。そうしてああいう条

件を、俺の眼前へ出したのだ。……そこで、俺はハッキリという、お前は俺が良心のために、――俺の持っている良心のために――もがき苦しむのを見ようとして、ああいう条件を出したのだと！　そうしてそれは成功した。で俺は苦しんだよ」

突然ここで武士の声は、悲しそうな呻くような調子となった。

「良心のない者は幸福だ。それは何物にもとらえられないから」

ここで一層武士の声は、悲しそうな調子を帯びて来た。

「ところが俺は持っていた。だから締め木にかけられたのだ！　お前だお前だ、掛けたものは！」

武士の姿は解らない。部屋に燈火がないからである。闇黒の中で誰にともなく、呼びかけ話しかけているのである。

独立をした建物である。

建物の周囲は庭園である。

樹木がすくすくと繁っている。

だが月光がさしている。

その月光に照らされて、その建物がぼんやりと見える。一所瓦屋根が水のように光り、一所白壁が水のよ

うに光り、その外は木蔭にぼかされている。
その中でしゃべっているのである。
広大な母屋が一方にある。そこから廻廊が渡されてある。
と、その廻廊の一所へ、ポッツリと人影が現われた。
若い娘の姿である。
建物に向かって声をかけた。
「お父様、お父様！」
肩の辺に月光がさしている。で、そこだけが生白く見える。
「お父様、お父様！」

――すると、建物の戸口から、ポッツリと人影が現われた。
戸口と廻廊とは続いている。
現われたのは武士であった。
しゃべっていた武士に相違ない。
ちょうど廻廊の真ん中どころで、二つの人影はいきあった。そこへは月光がさしていない。で、姿はわからない。
ただ、声ばかりが聞こえて来る。
「いよいよ今晩でございます。今晩限りでございます」

こういったのは娘らしい。
「ああそうだよ、今晩だよ。そうして今晩限りだよ」
こういったのは武士らしい。
と、しばらく無言であった。

三

ザワ、ザワ、ザワと音がする。木立へ宵の風が渡るらしい。
泉水の水が光っている。月が照らしているからだろう。

泉水の向こう側がもり上がっている。大きな築山でもあるのだろう。その頂きがぬれている。月光がこぼれているからだろう。パタ、パタ、パタ、パタ、パタ、パタ……水鳥の羽音が聞こえて来る。泉水に飼われているのだろう。

一団の真っ白の叢が見える。築山の裾に屯ろしている。ユラユラユラユラユラと揺れ動く。と、芳香が馨って来た。

牡丹が群れ咲いているのらしい。

と、娘の声がした。

「今夜も行かなければなりますまいか」悲しんでいる

ような声である。
「お行きお行き、行っておくれ」これは武士の声であった。
「それもお前のためなのだから」
「あぁ」と娘の声がした。「どうでもよいのでございます。私のためなど、私のためなど」
咽び泣くような声であった。
「ただ私はお父様のために……」
「娘よ」と武士の声がした。「同時に私のためにもなるよ」
「参るどころではございません。お父様のおためにな

りますのなら」
ここでまたもや声が絶えた。
で、ひっそりと静かである。
ピシッ！　と刎ねる音がした。
泉水で鯉でも刎ねたのだろう。
やっぱり静かだ。風も止んだ。
と、また娘の声がした。
「恋の囮（おとり）！　恋の囮！」
「いや」とすぐに武士の声がした。「幸福の囮！　幸福の囮！」
だが娘は反対らしい。「金の囮でございます！」

「仕方がないのだ、そういうことも。……この世に生きている以上はな」
「でもいつまでもお父様と、一緒に暮らすことが出来ましたら……」娘の声は思慕的であった。
「思うところはございません」
「それが……」と武士の声がした。たしなめるような声であった。「こういう受難を産んだのだよ」
「可哀そうな可哀そうなお母様！」
「だが私達も可哀そうだった」
「虐（しいた）げられたのでございますから」
「で、それから逃がれなければならない。そうしてそ

の上へ出なければならない」
「逃がれなければなりません。その上へ出なければなりません」
「で、お前は行かなければならない」
「弁吉、右門次、左近を連れて……」
「そうだ、そうして、その上で、所作をしなければならないのだ」
「同じようなことを、長い間……」
「目っからないからだよ、適当な人が……」
「恐らく生涯目っかりますまい」
「目っけなければならないよ。……それも今夜！　今

夜限りに！」武士の声には真剣さがあった。

「でも、お父様のある限りは……」こういった娘の声の中には、いよいよ思慕的の響きがある。

と、泣き声が聞こえて来た。

娘が泣いているのらしい。

まだ宵である。で静かだ。屋敷は郊外にあるらしい。

「行っておいで！」と武士の声がした。

「はい」と娘の声がした。

後は森閑と静かである。

間もなく門の開く音がして、それが遠々しく聞こえて来たが、すぐに閉じる音がした。

武士だけが一人立っている。じっとうなだれて考えている。肩の辺に月光がさしている。

と女の呼ぶ声がした。

「今夜はお遁がしいたしません」

「うむ、お前か、うむ、島子か」

「はい」

と女が現われた。中年者らしい女である。

廻廊を伝って寄って来た。

「はっきりご返辞してくださいまし」

四

ここに一人の武士があった。
微禄ではあったが直参であった。といったところでたかが御家人、しかし剣道は随分たっしゃで、度胸もあれば年も若かった。悪の分子もちょっとあり、俠気もあってゴロン棒肌でもあった。名は結城旗二郎、欠点といえば美男ということで、これで時々失敗をした。
「アレーッ……どなたか！　……助けてくださいよーッ」女の悲鳴が聞こえて来た。
お誂え通りわるが出て、若い女をいじめているらしい。

「よし、しめた、儲かるかもしれない」
で、旗二郎駈け付けた。
案の定というやつである、ならずものらしい三人の男が、一人の娘を取りまいていた。
「これ」といったが旗二郎、「てんごうはよせ、とんでもない奴らだ！」
「何を！」
と三人向かって来た。
「何をではない、てんごうは止めろ」
「何を！」
と一人飛び込んで来た。

「馬鹿め！」
と抜いた旗二郎、ピッシリ、平打ち、撲（は）り倒した。
「野郎！」
ともう一人飛び込んで来た。
「うふん」
ピッシリ、撲り倒した。
「逃げろーッ」
三人、逃げてしまった。
「あぶないところで、怪我はなかったかな？」こういう場合の紋切り型だ、旗二郎娘へ声を掛けた。
すると娘も紋切り型だ。「はい有難う存じました。

お蔭をもちまして幸いどこも……」

「若い娘ごが一人歩き、しかもこのような深夜などに……」これもどうにも紋切り型である。

「送って進ぜよう、家はどこかな？」どこまでいうても紋切り型である。

ところがそれが破壊されてしまった。紋切り型が破壊されたのである。

「屋敷はここでございます」

二人の前に宏大な屋敷が、門構え厳（いか）めしく立っていたが、それを指差していったからである。

「ははあ」といったものの旗二郎、化かされたような

気持ちがした。「それではご自分の屋敷の前で、かどわかされようとなされたので？」

「はいさようでございます」

「つまらない話で」と鼻白んだ。せっかくの武勇伝も駄目になったからだ。「が、それにしても迂闊千万！……何さ何さあなたではござらぬ。あなたの家の人達のことで。……あれほど悲鳴を上げられたのに、出て来られぬとはどうしたもので」こうはいったものの馬鹿らしくなった。（そんなことどうだっていいではないか。こっちにかかわりあることではない。先様のご都合に関することだ）「では送るにも及びますまいな」

（あたりまえさ！）とおかしくなった。（十足もあるけば家の中へはいれる）「ご免」といいすてるとあるき出した。（どうもいけない、儲けそこなったよ）

だがその時娘がとめた。「どうぞお立ち寄りくださいまし。お礼申しとう存じます。あの、父にも申しまして」それから門をトントンと打った。「爺や爺や、あけておくれ」

「ヘーイ」と門内から返辞があって、すぐ小門がギーと開いたが、「お侍様え、おはいりなすって。……さあお嬢様、あなたからお先へ」

「はい」と娘、内へはいった。「どうぞお立ち寄りくだ

さいまし」これは門内からいったのである。
　結城旗二郎いやになった。「『爺や爺やあけておくれ』『へーイ』ギー、門があいて、『お侍様えおはいりなすって』これではまるで待っていたようなものだ。おかしいなア、どうしたというのだ、薄っ気味の悪い屋敷じゃアないか」
　で改めて屋敷を見た。一町四方もあるだろうか、豪勢を極めた大伽藍、土塀がグルリと取り廻してある。塀越しに繁った植え込みが見える。林といってもよいほどである。
「この屋敷へノコノコはいって行くには、俺のみなり、

は悪過ぎるなあ」

　中身は銘（な）ある長船（おさふね）だが、剝げチョロケた鞘の拵えなどが、旗二郎を気恥ずかしくさせたのである。

とまた娘の声がした。「お礼申しとう存じます、どうぞお立ち寄りくださいまし」

「度胸で乗り込め、構うものか」

で旗二郎入り込んだが、これから大変なことになった。

五

ここは屋敷の一室である。

三十五、六の武士が、旗二郎を相手に話している。

「ようこそお助けくださいました。千万お礼を申します。あれは娘でございましてな、名は葉末、年は二十歳、陰気な性質ではございますが、その本性はしっかりものでござる。……迂闊と申せば迂闊の至りで、自分自身の屋敷の前で、かどわかされようとしましたので。とはいえどうもこの屋敷、ご承知の通り甚だ手広く、たとえ門前で悲鳴いたしても、母屋へまでは容易に聞こえず、困ったものでございます。……おおおこれは申し遅れました、拙者ことは当屋敷の主人、

三蔵(みくら)琢磨にございます。本年取って三十五歳、自分は侍ではございますが、仕官もいたさず浪人者で、それに性来書籍が好きで、終日終夜紙魚(しみ)のように、文字ばかりに食いついております次第、隠居ぐらし、隠遁生活、それこそ庭下駄を穿かないこと、二十日間にもわたろうかという、そんな生活をいたしております。……はあ、あなた様でございましたか、なるほどなるほどご浪人で、ほほうお名前は結城旗二郎殿で、で、お年は？　二十三歳？　それはそれは、ちょうどよろしい。二十歳と二十三歳、全く頃加減でございますからな。……ほほうさようで、御家人の御身で、天下の

直参、まことに結構、何んの申し分がありましょう。……ははあご家計はご不如意とか？　なんのなんのそのようなこと、問題になることではございません。……家計と申せば当家などは、それこそ人の羨むほど、豊かなものではございますが、そのためかえって煩い多く、敵さえあるのでございますよ。……が、まずそれはそれとして、もはや深夜でございますので、なにとぞ別室でお休みあって、明朝ゆるゆるお話をな。……いやはやこれはとんでもない、ご内室の有無も承わらず、おとめしようとは失礼いたしてござる。しかしどうやら拝見しましたところ、ご独身のように存ぜら

れますが。……あッ、さようで、それは幸い、やはりご独身でございましたかな。何から何までよい具合で。……それに大変武芸にも勝れ人品もよく骨柄もよく、お立派なものでございますよ。……ええとところで今夜でござるが、ひょっとかすると当屋敷へ、襲って来る人間があるやも知れず、ええその際にはご武勇をな、ぜひともお揮い願いたいもので。……ええとそれからもう一つ、ひょっとかすると当屋敷に、ちょっと変わった事件が起こり、お驚かせするかも知れませぬが、決して決してご介意なく、安心してお泊まりくださるよう」

三蔵琢磨というこの家の主人、こんな具合に話すのであった。

その琢磨の風貌だが、まことに立派なものであった。艶々しい髪を総髪に結び、バラ毛一筋こぼしていない。広い額、秀でた眉、――それがノンビリと一文字である。軟らか味を持ち冴え返り、人情と智恵とを兼有したような、非常に美しい穏かな眼。鼻の高さ形のよさ、高尚という言葉さながらである。どこか女性的の小さな口。唇は刻薄に薄くもなく、さりとて卑しく厚くもない。で、やっぱり立派なのである。豊かな垂れ頬、ひきしまった頤、厚い耳たぶ、長目の首、総体

が華奢（きゃしゃ）で上品で、そうして何んとなく学者らしい。体格は中肉中身長（ぜい）である。顔に負けない品位がある。着流しの黒紋付き、それで端然と坐っている様子は、安く踏んでも大旗本である。品位と貫禄と有福と、智恵と人情とを円満に備えた、立派な武士ということが出来る。

　だが一つだけ不思議なのは、そのいうことやいう態度に、おちつきのないことであった。どことなく何んとなくオドオドしている。何物をか恐れているようである。いっている言葉にも矛盾がある。そうしていわないでもよいようなことまで、いっているようなとこ

ろがある。といってもそれが悪い心から、発しているものとは思われない。で、もちろん、加工的でもない。自然とそんなようになるのらしい。だからいよいよ変なのである。

何かに脅えているのらしい。何かに縋ろうとしているのらしい。助けられたがっているのらしい。――つまりそんなように見えるのであった。

「どうも不思議な人物だな。……変なところへ入り込んでしまった」

結城旗二郎は気味悪くなった。

「俺の意志など勘定にも入れず、勝手に決めてしまう

のだからな。……俺が泊まろうともいわない先に、勝手に泊まることに決めてしまった。……が、どっちみちこの人物、悪党でないことは確からしい。で、この点は安心だ。いやいや悪党どころではない、非常に勝れた人物らしい。……だがそれにしても変だなぁ、娘の親だとはいうけれど、ちっとも二人とも似ていないではないか。それにさ少し若過ぎる。娘の親としては若過ぎる。二十歳の娘に三十五歳の親。とすると十五で出来た子だ。女が十五で子を産むはいいが、男親の方が十五歳で子を産ませるとは早過ぎる。……といって、もちろん世の中に、全然ないことではないけれど

な。……それにしても娘はどうしたんだろう？　ちっとも姿を見せないではないか。……それにさこんなに途方もない、立派な広い屋敷だのに、一向召使いがいないらしい。考えてみれば、これも変だ。……何物か襲って来るという、その時には武勇を揮ってくれという、どう考えても変な屋敷だ。……が、まあまあそれもよかろう、よろしいよろしい乞われるままに、今夜この屋敷へ泊まってやろう。何か秘密があるのだろう、ひとつそいつをあばいてやろう」

で、旗二郎泊まることにしたが、はたしていろいろ気味の悪いことが、陸続として起こって来た。

六

通された部屋は寝所であった。
豪勢な夜具がしいてあった。
一通りの物が揃っていた。というのは結構な酒肴が、タラリと並べられてあるのであった。蒔絵の杯盤、蒔絵の銚子、九谷の盃、九谷の小皿、九谷の小鉢、九谷の大皿、それへ盛られた馳走なども、凝りに凝ったものである。金屏風が一双立て廻してある。それに描かれた孔雀の絵は、どうやら応挙の筆らしい。朱塗りの

行燈が置いてある。その燈火に映じて金屛風が、眼を射るばかりに輝いている。片寄せて茶道具が置いてあり、茶釜がシンシンシン音立てている。

茶も飲めれば酒も飲める。寝たければ勝手に寝るがよい、寝ながら飲もうと随意である――といったように万事万端、自由に出来ているのであった。

が、一つだけ不足のものがあった。

酌をしてくれるものがないことである。

上蒲団を刎ねた旗二郎、見ている者もないところから、敷蒲団の上へあぐらを組み、手酌でグイグイ飲み出したが、考え込まざるを得なかった。

「どう考えたって変な屋敷だ、どう思ったたって変な連中だ、からきし俺には見当がつかない。……それにさ、さっきの主人の言葉に、妙に気になる節があった」
というのは他でもない、「二十歳と二十三歳、ちょうど頃加減でございますからな」こういった主人の言葉である。
「これでは、まるでこの家の娘——そうそう葉末とかいったようだが、それと、この俺とを一緒にして、婚礼させようとしているように聞こえる。そういえば、さっき俺の身分を、それとなく尋ねたようでもあった。いよいよ合点がいかないなあ」

グイグイ手酌で飲んで行く。

だが酔いは少しも廻ろうともしない。心気がさえるばかりである。

「家の構え、諸道具や諸調度、これから推してもこの家は、大変もない財産家らしい。いや主人もそういった筈だ、人もうらやむほどの財産家だと。……その上娘はあの通り綺麗だ。婿にでもなれたら幸福者さ」

グイグイ手酌で飲んで行く。

葉末という娘の風采が、ボッと眼の前へ浮かんで来た。月の光で見たのだから、門前ではハッキリ判らなかったが、燈火の明るい家の中へはいり、旗二郎を父

親へひきあわせ、スルリと奥へひっ込んだまでに、見て取った彼女の顔形は、全く美しいものであった。キッパリとした富士額、生え際の濃さは珍らしいほどで、鬘を冠っているのかもしれない、そんなように思われたほどである。眉毛はむしろ上がり気持ちで、描いたそれのように鮮やかであった。鼻は高く肉薄く、神経質的の点があり、それがかえって彼女の顔を、気高いものに見せていた。唇は薄く、やや大きく、その左右がキュッと緊まり、意志の強さを示していた。だが何より特色的なのは、情熱そのもののような眼であった。どっちかといえば細くはあったが、そうして

何んとなく三白眼式で、上眼を使う癖はあったが、その清らかさは類稀（たぐいまれ）で、近づきがたくさえ思われた。女としては高い身長（せい）で、発育盛りの娘としては、少し瘦せすぎていることが、一方欠点とは思われたが、一方反対にそのために、姿が非常に美しく見えた。全体の様子が濃艶というより、清楚という方に近かったが、また内心に燃え上がっている、情熱の火を押し殺し、無理に冷静に構えているような、そんな様子も感ぜられた。

「あの娘と夫婦になる。どう考えたって有難いことだ」

旗二郎はこんなことを思いながら、グイグイ手酌で飲んで行った。
依然として酔いが廻らない。いよいよ眼が冴え心が冴え、とても眠気など射(さ)そうともしない。夜がだんだん更けて行く。更けるに従って屋敷内が、いよいよ静けさを呈して来る。
それにもかかわらず不思議なことには、訳のわからぬ不安の気が、旗二郎の心に感じられた。「よし」と突然どうしたのか、旗二郎は呟くと立ち上がった。取り上げたのは大小である。「どっちみち怪しい屋敷らしい。思い切って様子を探ってみよう。一室に籠もって

酒を飲んで、事件の起こって来るやつを、待っているのは消極的だ。こっちからあべこべに出かけて行き、屋敷の秘密を探ってやろう」

で、部屋から出て行ったが、はたして結城旗二郎、どんな怪異にぶつかったろう？

七

いつか旗二郎裏庭へ出た。

素晴らしく宏大な庭である。山の中へでもはいったようだ。

木立がかゝ黒く繁っている。築山が高く盛り上がっている。広い泉水がたたえられてある。いたる所に花木がある。泉水には石橋がかかっている。

ずっと遙かの前方で、月光を刎ねているものがある。風にそよいでいる大竹藪だ。その奥に燈火がともっている。神の祠でもあるらしい。燈明の火がともっているらしい。

地面は苔でおおわれている。で、気味悪く足がすべる。

一所に小滝が落ちている。それに反射して月光が、水銀のようにチラチラする。

と、ほととぎすのなき声がした。
「まるで大名の下屋敷のようだ。その下屋敷の庭のようだ」
呟きながら旗二郎、築山のうしろまで行った時である。
築山の裾に岩組があり、それの蔭から黒々と、一個の人影が現われた。
「おや」
と思った時、掛け声もなく、スーッと何物か突き出した。キラキラと光る！ 槍の穂だ！ 黒影、槍を突き出したのである。

「あぶない！」

と思わず叫んだが、「何者！」と再度声を掛けた。とその時には旗二郎、槍のケラ首をひっ摑んでいた。

と、黒影、声をかけた。

「先刻はご苦労、まさしく平打ち、ピッシリ肩先へ頂戴してござる。……で、お礼じゃ、槍進上！……そこで拙者はこれでご免！　ただしもう一人現われましょう」

スポリとどこかへ消えてしまった。

団々と揺れるものがある。雪のように真っ白い。白牡丹の叢があるのであった。黒い人影の消えた時、恐

らく花を揺すったのであろう。プーンと芳香が馨って来た。

「驚いたなあ、何んということだ。物騒千万、注意が肝腎。……檜進上とは胆が潰れる。……待てよ待てよ、何んとかいったっけ『先刻はご苦労、まさしく平打ち、ピッシリ肩先へ頂戴してござる』——ははあそうするとさっき方、この家の娘を門前で、かどわかそうとした奴だな？ ……ふうむ、それではあいつらが、潜入をしているものと見える。いよいよ物騒、うっちゃっては置けない。葉末とかいう娘のため、ここの庭から駆り出してやろう」

ソロソロと滝の前へ出た。

そこをよぎると林である。蘇鉄（そてつ）が十数本立っている。

と、その蔭から声がした。「これは結城氏結城氏、さっきは平打ち、いただいてござる。で、お礼！　まずこうだ！」

ポンと人影飛び出して来た。キラリと夜空へ円が描かれ、続いて鏘然（しょうぜん）と音がした。パッと散ったは火花である。切り込んで来た敵の太刀を、抜き合わせた結城旗二郎、受けて火花を散らしたのである。

二人前後へ飛び退いた。

「お見事」と敵の声がした。「が、もう一人ご用心！

ご免」
というと消えてしまった。
蘇鉄の頂きが光っている。月があたっているかららしい。
「ふざけた奴らだ」と旗二郎、気を悪くしたが仕方なかった。庭は宏大、地の理は不明、木立や築山が聳えている。どこへ逃げたか解らない。追っかけようにも追っかけようがない。
「よし」と旗二郎決心した。「もう一人出るということだ。今度こそ遁がさぬ、料理してくれよう」
だがその企ても駄目であった。

というのは旗二郎抜き身を下げ、用心しながら先へ進み、竹藪の前まで来た時である、竹藪の中から声がした。

「お手並拝見してござる。なかなかもって拙者など、お相手すること出来ませぬ。先刻の平打ちも見事のもの、十分武道ご鍛練と見受けた。ついてはお願い、お聞き届けくだされ。……ずっと進むと裏門になります。そこから参るでございましょう、十数人の武士どもが。……今回こそはご用捨なく、手練でお打取りくださいますよう。……それこそ葉末殿のおためでござる。また、ご主人のおためでござる。ご免」と一声！　それっ

きりであった。いや、ガサガサと音がした。竹藪を分けてどこともなく、どうやら立ち去ってしまったらしい。

「何んということだ」と旗二郎、本当に驚いて突っ立った。

「きゃつら敵ではなかったのか。葉末殿のため、ご主人のため、こういったからには敵ではなく、味方であるとしか思われない……。ではなぜ切り込んで来たのであろう？　ではなぜ葉末というあの娘を、かどわかそうとしたのだろう？　何が何んだか解らない。解っていることはただ一つだ、怪しい館だということだけ

だ。どうでもこの屋敷、どうでも怪しい」

旗二郎怒りを催して来た。翻弄されたと思ったからである。

「主人のためでなかろうと、娘のためでなかろうと、俺は俺のために叩っ切る。来やがれ！　誰でも！　叩っ切る！」

で、スルスルと足音を忍ばせ、先へ進むと木立があり、それを抜けた時行く手にあたり、取り廻した厳重の土塀が見え、ガッシリとした裏門が、その一所に立っていた。

「うむ、あいつが裏門だな」

小走ろうとした時、トン、トン、トン、と、その裏門を外の方から、忍びやかに叩く音がした。

と、一つの人影が、母屋の方から現われた。意外にも女の姿である。裏門の方へ小走って行く。で、旗二郎地へひれ伏し、じっと様子をうかがったが、またも意外の光景を見た。

八

というのは他でもない、小走って来たその女と、門外にいるらしい男との間に、こんな話が交わされたの

である。
「首尾はどうだ？」と男の声がした。
「今夜十二時……」と女の声が答えた。
「ハッキリした返辞をするそうだよ」
「ナニ十二時？」と怒ったように、「それでは少し遅いではないか」
「遅くはないよ」と女の声も、何んとなく怒っているようである。「十二時キッチリにまとまったら、何んのちっとも遅いものか」ぞんざいな伝法な口調である。
「が、一分でも遅れては駄目だ」不安そうな男の声である。

「九仞の功を一簣に欠くよ」
「百も承知さ」と嘲笑うように、「お前さんにいわれるまでもない」
「で、どうだい?」とあやぶむように、「まとまりそうかな、その話は?」
「そうだねえ」と女の声、ここでいくらか不安らしくなった。「はっきり、どっちともいわれないよ」
「腕がないの」と憎々しく、男の声は笑ったらしい。
「それでもお前といわれるか」
「お互いッこさ」と負けてはいない。「そういうお前さんにしてからが、大して腕はないではないか」女の

声も憎々しくなった。「こんな土壇場へ迫り詰まるまでいったい、何をしていたんだい」

「止せ！」といったものの男の声は、どうやら鼻白んだ様子である。「争いは止めよう、つまらない」

ここでしばらく沈黙した。

茂みに隠れ、地にへばりつき、、、、聞き耳を立てていた旗二郎、「解らないなあ」と呟いた。「何をいったいいっているのだろう？」

しかしどっちみち男も女も、善人であろうとは思われなかった。ここの屋敷の人達に対し、よくないことを企んでいる——そういう人間どもであることは疑が

いないように思われた。
「事件は複雑になって来た。いよいよもって怪しい屋敷だ。……門外の男は何者だろう？　眼の前にいる女は何者だろう？」
で、旗二郎微動もせず、なおも様子を窺った。
「とにかく」と男の声がした。門の外にいる男の声だ。
「お前さんもさ」といい返した。門内の女がいい返した
「是が非でも成功させるがいい」
のである。「万全の策をとるがいいよ」
「いうまでもないよ」と笑止らしく、「武士を入れるよ、切り込みのな。……備えはどうだ、屋敷内の備えは？」

「宵の間に一人若い武士が、屋敷へはいって泊まり込んでいるよ」

「え？」といったが驚いたらしい。「どんな人品だ？立派かな？」

「ああ人品は立派だが、御家人らしいよ。安御家人らしい」

「ふうん」といったまま黙ってしまった。

門内の女も黙っている。で、森閑と静かである。ピシッ、ピシッと音がする。泉水で鯉が跳ねたのらしい。

「俺の噂をしているわい」ニヤリと笑った旗二郎、「立派な人品とは有難いが、安御家人とは正直すぎる」―

――で、なお様子をうかがった。

と、男の声がした。「どっちみち油断は出来ないの。うかうかしていてその御家人に、玉を取られては一大事だ。……よしよしすぐに手配りをしよう」

「それがいいよ」と女がいった。「それでは私は帰るとしよう」

そこで女は木立をくぐり、母屋の方へ帰ったが、間もなくポッツリと土塀の上へ、一つの人影が現われた。覆面をした武士である。とまたポッツリともう一つ、同じく覆面姿の武士が土塀の上へ現われた。

隠れ窺っていた旗二郎、「ははあ切り込みの武士達

だな。よしよし端から叩っ切ってやろう」
——で、ソロソロと身を起こし、片膝を立てると居合い腰、大刀の柄へ手を掛けたが、プッツリと切ったは鯉口である。上半身を前のめりに、肘をワングリと鈎に曲げ、左の足を地面へ敷き、腰を浮かめたは飛び出す構え……頤を上向け額を反らし、上眼を使って睨んだは、土塀の上の人影が、飛び下りるのを狙ったのである。
「来やがれ、悪人、一人も残さぬ！　生れて初めての人殺しだ。片っ端から退治てみせる」
心の中で呟いた時、一つの人影土塀から、スーッと

庭へ飛び下りた。

　とたんに、抜き打ち、旗二郎、いざったままにスルリと出、右腕を延ばすと一揮した。月光の射さない木影の中、そこへ全身は隠していた。が、一揮した太刀先だけは、月光の中へ出たと見える。ピカリと燐のように閃めいたが、閃めいた時にはその太刀先、木影の中へ引っ込められていた。

　グッ！　といったような変な呻き、飛び下りた武士の口から出て、息詰まるような様子であったが、まず両手を宙へ上げ泳ぐような格好をしたかと思うと、ドッと前倒れにぶっ倒れた。腰から上の半身が、月光

の中に晒されている。背がムクムクと波を打つ。それにつれて肩がS形にうねる。左の胴から黒いものが、ズルズルズルズルズルズル引き出されている。昼間見たら真っ赤に見えただろう、傷口から流れ出る血なのだから。と、まったく動かなくなった。

「どうした島路」という声がした。土塀の上のもう一人である。と、ヒラリと飛び下りた。「不覚だの、転んだのか？」

腰をかがめて覗き込んだ。

そこを目掛けて旗二郎、またもスルスルといざり出たが、今度は瞬間にスッと伸ばし、背高々と爪立った

が、こんな場合だ、卑怯ではない。声も掛けずに背後から、後脳を目掛けてただ一刀！　ザックリ割って飛びしさった。

すぐに木影へ隠れたのである。

九

ガッ！　といったような気味の悪い悲鳴、一声立てたが切られた武士だ。枯れ木仆しにそのままに、前方へドッと仆れたので、前に仆れていた死骸の上へ、蔽うようにして転がった。

月光それを照らしている。

急所を一刀に割られたのである。躰に痙攣を起こしもせず、静まり返って死んだらしい。

「二人仕止めた、これだけかな」

木影に立った旗二郎、決して決して油断はしない、血刀を下段に付けながら、眼で塀の上を見上げながら、さすがに少しばかり切迫する、胸の呼吸を静めながら、こう口の中で呟いた。

すると呟きの終えないうちに、土塀の上へ黒々と、五つの人影が現われた。同じである、覆面姿、武士であることはいうまでもない。じっと地面を見下ろした

が、どうやら不思議に思ったらしい、五人ヒソヒソ囁き出した。

と、キラキラと光り物がした。

五人ながら刀を抜いたのである。

それが月光を刎ねたのである。

「オイ」と一人の声がした。

「うむ」と答える声がした。

「やられたらしい」ともう一人の声。

「島路と、そうして大里だ」

「そうらしいの」ともう一人。

「敵に防備(そなえ)があるらしい」さらにもう一人の声がした。

と、一人が振り返った。「味方両人してやられてござる。……いかがしましょうな、花垣殿？」

すると門外から返辞がした。

「防備あるのがむしろ当然。……よろしい拙者も参るとしよう。……六人同時に切り込むといたそう」

すぐにもう一つの人影が、土塀の上へ現われた。

同一の覆面である。

「では」

というと飛び下りた。

六人一緒に集まったが、二つの死骸を調べ出した。

木影で見ていた旗二郎、「これはいけない」と考えた。

「六人と一人では勝負にならぬ。引っ返して屋敷の人達に、このありさまを知らせてやろう」

　そこで物音を立てぬよう、彼らに姿を見せぬよう、背後（うしろ）下がりに退いた。数間来た所でクルリと振り向き、抜き身を袖で蔽ったが、腰をかがめると木蔭づたい、母屋の方へ小走った。

　築山裾まで来た時である。

「ご苦労でござった、結城氏」

　こういう声が聞こえて来た。

と、すぐ別の声がした。

「我らこちらを守りましょう。願わくば貴殿、石橋を

渡られ、向こうに立っている離れ座敷、それをお守りくださるよう」
とまた別の声がした。
「そちらに主人おりますのでな」
どこにいるのか解らない。どこかに隠れているのだろう。そうして悉皆(しっかい)を見たのだろう。

十

「ははあ、さっきの奴らだな」
結城旗二郎察したが、問答をしている時ではない、

頼まれて人を切った以上、乗りかかった船だ、最後まで、手助けをしてやろうと決心した。

「承知」

と一声簡単にいったが、築山を巡ると泉水へ出、石橋を向こうへ渡り越した。

行く手に建物が立っている。廻廊で母屋とつながっている。独立をした建物である。木立がその辺を暗めている。雨戸がピッシリ閉ざされてある。

そこまでやって来た旗二郎、グルリと周囲を見廻したが、建物のはずれの一角の、暗い所へ身をひそめた。で、向こうをすかして見た。

が、庭木が繁っている。土塀のあり場所など解らない。したがって土塀から飛び下りた、六人の姿なども解らない。

深夜の裏庭は静かである。とはいえ殺気が漲（みなぎ）っている。

ピシッ！　鯉が飛んだのである。

パタパタ！　水禽（みずとり）が羽搏いたのである。

後は森然と風さえない。

だが殺気は漲っている。

「妙な運命にぶつかったものさ」旗二郎こんな場合にも、こんなことを考える余裕があった。

「ゆくりなく女を助けたのが、偶然人を殺す運命となった」

おかしいようにも思われた。

「どんな儲けにありつくかしらん？」

期待されるような気持ちもした。

「美人の葉末、手にはいるかな？」

ふと思ったので嬉しくもなった。

「養子にでもなれたら大したものだ。素晴らしい屋敷、宏大な宅地、手にはいろうというものさ、うまうま養子になれるとな」

ニコツキたいような気持ちもした。

「とにかくウンと働くのだ。見せつけてやろうぜ、冴えた腕を。だが」と母屋の方を見た。「肝腎の娘はどうしているんだ。肝腎の主人はどうしているんだ。いやに静まっているではないか……オツ、足音！」

と耳を立てた。

シトシトと足音が聞こえて来る。だが姿はわからない。木立を縫って来るからだろう。

不意に足音が消えてしまった。

と思った時また聞こえた。

「はてな？」と呟いたのはその足音が、二手に別れたからである。

三人ずつ二手に別れたらしい。こちらの方へ三人が来、母屋の方へ三人が、築山を巡って行くようである。

「いよいよ来るか」

と旗二郎、建物の角へ背中をつけ、太刀を中段、堅固に構え、奥歯を噛みしめ呼吸をととのえ、一心に前方をすかして見た。

だんだん足音が近づいて来る。だがまだ敵の姿は見えぬ。

すると忽然、太刀打ちの音！　築山の方から聞こえて来た。

チャリーンと一合！　つづいて数合！　それに続い

て数声の悲鳴！　向こうへ向かった敵を相手に、味方の三人が切り合ったらしい。

「ウム、やったな！　どうだ勝負は？　やっつけたかな？　やられたかな？」

旗二郎の全身はひきしまった。「出ろ出ろ出ろ！　こっちへも出ろ！」

ブルッと武者顫い（むしゃぶるい）をした時である。前方の繁った木立を抜き、颯（さっ）と走り出た人影があった。

三人の覆面の武士である。

「来い！」

と勇躍、旗二郎、建物の角から走り出た。

「悪漢！」
と一声、胆を奪い、真っ先に進んで来た一人を、サーッと右の袈裟に掛けた。
が、それは駄目であった。十分用心をしていたのだろう、旗二郎の太刀を横に払い、翻然斜めに飛びのいた。
「方々！」
「うむ」
「ご用心！」
三人声をかけ合ったが、抜き身を構えると三方へ開き、旗二郎を中へ取り込めようとした。

「これはいけない」
と旗二郎、ポンと飛び返ると闇の中――以前隠れていた建物の角へ、ピッタリ背中を食っつけたが、「さあて、これからどうしたものだ」
突嗟の間に思案した。
見れば三人の敵の勢、大事を取るのか早速にはかからず、且つは秘密を保とうとしてか、無駄な掛け声をかけようともせず、タラタラと三本の太刀を揃え、ジリジリ……ジリジリ……と寄せて来る。
いずれも相当の手利きらしい。が、その中では真ん中にいる、体付きのきゃしゃな一人の武士が、どうや

ら一番未熟らしい。そのくせどうやらその人物が、彼らの仲間での首領らしい。花垣と呼ばれた人物らしい。

「よし」

と旗二郎うなずいた。「真ん中の奴を打ち取ってやろう」

で、闇中に構えながら、その男の隙を窺った。ところがそれが自ら、その人物に感じられたらしい。卑怯にもスルスルと退いた。

「こやつ」

と思った旗二郎、卑怯な態度に気を悪くしたか、二人の敵のいるのを忘れ不覚にもツツーと進み出た。

と、月光がぶっかけて来た。で、全身が露出した。そこを狙った二人の武士、あたかも「しめた！」といわんばかりに、呼吸を合わせて左右同時、毬のように弾(はず)んで切り込んで来た。

「おっ」と叫んだ旗二郎、一瞬ヒヤリと胆を冷やしたが、そこは手練だ、切られなかった。

チャリーンと一刀、右手の太刀、それを抑えると首を返し、左手の一人を一喝した。すなわち鋭く甲の声で「カーッ」とばかりにくらわせたのである。声をかけられた左手の武士、ピリッとしたらしかったが太刀を引き躊躇するところを旗二郎、パッとばかりに足踏

み違え、太刀を返すとサーッと切った。

「ワッ」という悲鳴！　カチンという音！　すなわち切られた左手の一人、得物を落とすとヒョロヒョロヒョロヒョロと、背後の方へよろめいたが、左肩を両手で押えると、二本の足を宙に刎ね、ドンと背後へ**ぶっ**倒れた。

もうその頃には旗二郎、モロにうしろへ飛び返り、以前の場所だ、建物の角、闇の中へ体を没していた。

そうしてそこから呼んだものである。「さあ来い、さあ来い！　……さあ来い、さあ来い！」ここで**ゆっくり**と、「来やアがれエーッ」

グッと引きつけた太刀の柄、丹田にあてたは中段の序、そこでもう一度、

「来やアがれーッ」

だがこんな場合にも、旗二郎心中で考えていた。「随分切った、働いた。儲からなければやりきれない、娘の婿になれるかな。ここの養子になれるかな？」

——それだけの余裕があったのである。

十一

太刀音、悲鳴、「来やアがれーッ」の喚き、十分けた

たましいといわなければならない。で建っている離れ座敷の中に、一人でも人がいたのなら、出て来なければならないだろう。

ところが人は出て来ない。静まり返って音もしない。

それでは誰もいないのだろうか？

いやいや人はいたのである。

しかも男女二人いた。

ここは建物の内部である。

「さあご返辞なさりませ」

こういったのは女である。寝椅子の上に腹這っている。両肘で顎をささえている。乳のように白い肘であ

る。ムッチリとして肉づきがよい。顔は妖婦！　妖婦（バンプ）型である。髪をグタグタに崩している。黒い焔を思わせる。その髪に包まれて顔がある。目ばかりの顔ではあるまいか？　といったような形容詞をどうにもこの際用いなければ、到底形容出来ないような、そんな印象的な目をしていた。二重まぶたに相違ない。が、思うさま見開いているので、それがまるっきり一重まぶたに見える。目の中が黒く見えるのは、黒目が余りにも多いからだろう。白眼が縞をなしている。濃い睫毛（まつげ）の陰影が、そういう作用をしているのだろう。その目が一所を見詰めている。で黒目が二つながら、目頭の

方へ寄っている。で、一種の斜視に見える。斜視には斜視としての美しさがある。いや斜視そのものは美しいものだ。で、その女——島子なのであるが——その島子の人工的斜視は、妖精的に美しい。また蠱惑（こわく）的といってもいい。また誘惑的といってもいい。いやいや明きらかに彼女の目は、露骨に誘惑をしているのであった。紅を塗られた唇は尋常よりもグッと小さい。

島子は襲衣（したぎ）一枚である。一枚だけをひっかけている。真紅の色というものは、誘惑的ではあるけれど、あまりに刺戟があくどいため、教養ある人には好かれない。肉色こそはより一層、男の情慾をそそるものである。

それを島子は着ているのである。裾と胴とに鱗型をつけた、肉色絹の襲衣なるものを！　よい体格だ！　肥えている。腰のあたりがクリクリとくくれ、臀部がワングリと盛り上がっている。二本の足が少し開かれ、襲衣に包まれているのだろう、臀部から踵までの足の形が、襲衣を透かして窺われる。襲衣が溝を作っている。ひらかれた足のひらき目である。襲衣の襟が寛(くつろ)いでいる。で胸もとが一杯に見える。肋骨などあるのだろうか？　そんなようにも感じられるほど、脂肪づいた丸い厚い胸が、呼吸のために相違ない、ゆるやかに顫え動いている。

「味のよい果物がここにあります」
島子歌うようにいい出した。
「めしあがりませ、琢磨様！」
頤を支えていた左の腕を、こういいながらダラリと落とし、寝台の上へ長々と延ばした。と、襲衣の襟が捲くれ円々とした肩が現われた。連れて一方左の乳房が、タップリと全量を現わした。さも重たそうな乳房である。
「さあご返辞をなさりませ」
こういうと島子は眼を閉じた。いや半眼に閉じたのである。と大きな眼が急に細まり、下のまぶたへ濃い

かげが出来た。睫毛がかげを作ったのである。何んとひときわその眼付き、誘惑的になったことか！　陶酔的の眼であった。恍惚とした眼であった。

と、その眼をすっかり閉じ、支えていた右手を頤から取ると、島子はガックリ首を垂れた。寝椅子へ額を押しあてて、ベッタリ臥伏（うつぶ）せに寝たのである。襲衣の襟が楔形（くさびがた）に、深く背の方へひかれたためか、背筋まで見せて頸足が、ろくろっ首のように長くなった。そこへ髪の毛がもつれている。髪の毛の間からヌラヌラと、白い艶のよい肉が見える。海草の中から、白珊瑚が、チラチラ光っているようである。

「味のよいお酒がここにあります」
眠くて眠くてたまらないような、ぼっ、、とした声で、うっとりとこう島子は呼びかけた。
「お飲みなさりませ、琢磨様」
そろそろと全身をうねらせた。寝返りを打とうとするらしい。仰向(あおむ)けになろうとするらしい。
武士が一人立っている。
寝椅子の傍に立っている。
ほかならぬ三蔵琢磨である。
冷然として立っている。島子の嬌態など見ようともしない。顔など決して充血していない。といって決し

て青ざめてもいない。眼を正しく向けている。口を普通に結んでいる。足も決してふるえていない。こぶしなども決して握っていない。あくまでも冷静沈着である。

だが額の一所に、汗の玉のあるのはどうしたのだろう？

木彫のように黙っている。だがもし彼が物をいったら、ふるえないということがどうしていえよう。ふるえ声を女に聞かれるのを、恐れて物をいわないのかもしれない。

なぜ彼は島子を見ないのだろう？　そういう女の婿

態などに、感興をひかないたちだからだろうか？　そういうようにも解される。だがその反対にも解される。そういう嬌態の誘惑を恐れ、それで島子を見ないのだと。

だが彼はある物を見てはいた。

彼の正面に壁がある。そこにある物がかかっていた。文政時代に似つかわしくない、外国製の柱時計であった。

黒檀の枠、真鍮の振子！　振子は枠から長く垂れ、規則正しく揺れている。で、そこから音が聞こえる。

カチ、カチ、カチ、……カチ、カチ、カチ！　――セ

コンドを刻む音である。
長針と短針とが矢のように、白い平盤の表面に、矩形をなして突き出ている。その周囲を真円に囲み、アラビア文字が描かれてある。短針は十二時を指そうとしている。しかし長針は十時にあった。
カチ、カチ、カチ、……カチ、カチ、カチ、……時は刻々に移って行く。
「十分前だ！」
呻くような声！　琢磨の口から出たのである。冷静な顔や態度にも似ず、息詰まるような声であることよ！

カチ、カチ、カチ……カチ、カチ、カチ！

時は刻々に移って行く。

二人の男女を包んでいるところの、部屋の様子というものも、まことに異様なものであった。

十二

とはいえ今日の眼から見れば、洋風の書斎に過ぎないのではあるが。

壁の一方にドアがあり、壁の一方に窓があり、巨大な書棚が並んでおり、書物がギッシリ詰まっており、

数脚の椅子と卓とがあり、洋燈が卓の上に燃えており、それに照らされて青磁色をした、床の氈が明るんでおり、同じ色をした窓掛けが、そのひだにかげをつけており、高い白堊の天井の、油絵の図案を輝かせている。

——というまでに過ぎなかった。

とはいえ時代は文政である。所は江戸の郊外である。そういう時代のそういう所に、こういう部屋のあるということは、かなり驚いてもよいことであった。

さらに驚くべきものがあった。

とはいえそれとて一口にいえば、一枚の張り紙に過ぎないのではあるが——だがその張り紙に書かれてあ

る、四ツの箇条書きを見た人は、非常に驚くに相違ない。

時計の真下、振子の下に、張り紙は張ってあるのであった。

「八分前だ！」

呻くような声！　琢磨の口から出たのである。

と、島子の声がした。

「こちらをお向きなさいまし」

だが琢磨はまたいった。

「四分前だ！　もうすぐだ！」

「こちらをご覧なさいまし。きっと見ることが出来ま

しょう！　私の肌を！」
やっぱり琢磨呻くようにいう。
「三分前だ！　もうすぐだ！　そうしたら解放されるだろう！」
あせった島子の声がした。
「あなたは見ることが出来ましょう！　私の肌を！」
だがまた呻くように琢磨がいった。
「後二分だ！　後二分だ」
同じく呻くように島子がいう。
「ご覧なさりませ！　ご覧なさりませ！　白い私を！
真っ白い私を！」

「後一分！」

「素裸体（すはだか）の私！」

だが、その時音がした。

十二時を報ずる時計の音！

同時に庭から声がした。声というより悲鳴であった。しかも断末魔の悲鳴であった。しかも二人の悲鳴であった。

同時に寝台からも声がした。これもやっぱり悲鳴であった。やはり断末魔の悲鳴であった。

ギーッ！　音だ！　ドアが開いた。

「あなた！」

「娘か！」
「いいえ葉末！」
「葉末というのか？」
「あなたの花嫁！」
ひらかれたドアから現われたのは、花嫁姿の葉末であった。
「おいで！」
と琢磨、手をひろげた。
で、葉末と三蔵琢磨、はじめてやさしく抱擁した。
その時壁からヒラヒラと、床の上へ落ちたものがある。

四ヵ条を記した張り紙である。風かないしは幽霊の手か？　どっちかがその紙を壁から放し、床の上へ落としたに相違ない。

十三

「何んでもなかったのでございますよ。つまり私の役目といえば、用心棒に過ぎなかったので。原因は四ヵ条を書き記した、張り紙なのでございますよ。で、それからいうことにしましょう。（一）養女と良人と結婚すれば、財産は官へ寄附する事（二）養女が二十歳

になるまでに、養女が死ぬか良人が死ぬか、ないしは二人死去するか、そういう場合には財産は、全部情人が取るべき事（三）養女満二十歳になった瞬間、その養女が誰かと結婚すれば、財産は養女と良人とが、半分ずつ分けて取るべき事（四）養女が二十歳になるまでに、良人が他の女と結婚すれば、財産は情人と養女とが、半分ずつ分けて取るべき事。——というのが四カ条の箇条書きなので。そうしてこれを書いたのは、養女——すなわち葉末さんですが、その葉末さんの養母であり、そうして三蔵琢磨氏の家内、陸女という女だということで。情人というのは他でもない、花垣志

津馬という武士なのだそうで。遺言状だったのでございますよ。陸女の死ぬ時の遺言状だったので。その陸女という女ですが、ある札差しの家内でしてな、大変な財産を持っていたそうで。そうして後家さんになってから、琢磨氏と同棲したのだそうで。しかし自分の財産だけは、自分で持っていたそうです。そうして非常な漁色家で、花垣という美男の浪人と、関係していたということです。で、子が一人もないところから、葉末さんという娘を養女にしたところ、どうやら養女の葉末さんと、良人の琢磨氏とが愛し合っているらしい。で、嫉妬をしたのですね。そのうち死病にとっつ

かれ——業病だったということですが——死んでしまったのでございますよ。ところが死んで行く前までも、養女と良人との関係が、どうにも心にかかってならない。そこでそんなような遺言を——とても意地の悪い遺言を、残して行ったのだということです。ナーニ本人は死んでいるんだ、そんなつまらない遺言なんか、履行しなくたっていいのですが、その琢磨氏という人が、西洋の学が大すきで、こっそり研究しているうちに、死者の遺言というようなものを、尊重するようになったので、こだわってしまったのでございますね。だがやり口がひどいというので、時々夜など遺言

状の前で、生きてる女房に話しかけるように、大きな声で口説いたそうです。つまり非難をしたという訳で。……ところが遺言の中身ですが、よめばお解りになる通り、琢磨氏は葉末さんと結婚は出来ない。結婚すれば財産は、官へ没収されてしまう。葉末さんが二十歳になる前に、葉末さんも琢磨氏も死ぬことは出来ない。一人死んでも二人死んでも、財産は情人の花垣志津馬に、みんな取られることになる。で二人ながら注意して死なないようにしなければならない。葉末さんが二十歳になる前に、琢磨氏は誰とも結婚出来ない。もし琢磨氏が結婚すれば、財産は葉末さんと花垣とで、折

半をして取ってしまう。ところで一方葉末さんとしては、満二十歳になった瞬間、ぜひ誰かと結婚しなければならない。もしその時結婚すれば、財産は葉末さんと琢磨氏とで、折半をして取ることが出来る。……しかるに一方花垣としては、葉末さんが二十歳になる前に、葉末さんを殺すか琢磨氏を殺すか、ないしは二人を一緒に殺すか、とにかくなきものにしなければならない。そうしてそれに成功すれば、財産はすっかり手にはいる。が、もしそれが出来なければ、何者か美人を差し向けて、三蔵琢磨氏を誘惑し、ぜひとも結婚させなければならない。そうしてそれに成功すれば、全

財産の半分だけを、自分の手中に入れることが出来る。

そこで花垣志津馬ですが、一方島子という自分の情婦を、琢磨氏の家へ入り込ませ、琢磨氏を誘惑させたそうです。大変もない美人だったので、琢磨氏も随分そそのかされ、あぶない時などもあったそうですが、とうとう誘惑に勝ったそうです。負けた島子はくやしがって、舌を噛んで死んだということですが、いってみれば天罰覿面（てきめん）でしょう。さらに一方花垣志津馬は、無頼の浪人を手下とし、葉末さん誘拐を企てたり、琢磨氏殺害を巧（たく）んだり、いろいろ奸策をしたそうです。

そうして養女の葉末さんが、満二十歳になる晩には、

衆を率いて自分から、琢磨氏の屋敷へ切り込んだそうで。で、そいつを退治たのが、私だったのでございますよ。もっとも私以外にも、弁吉、右門次、左近などという、三人の忠義の家来があって、花垣部下の浪人を、三人がところ叩っ切り、災いを根絶しましたがね。……その三人で思い出しました。今考えてもおかしな話で、私はそれら三人へ、ピシピシ平打ちをくれたもので。ごろつきだと思いましたので。つまり葉末さんをかどわかそうとした、ならずものだと思いましたので。いやまた事実そうでもあったのです。というのは外でもありません、そんなような狂言をすることに

よって、手のきく武士を味方につけ、花垣一派の切り込みに、備えようとしたのでございますよ。……そうして娘の葉末さんさえ、もし承知をするようなら、私と夫婦にさせようと、事実琢磨氏は考えていたそうで。ところがどうもこの拙者、葉末さんの御意にかなわなかったと見え、真似事の結婚をしたばかりで――さようさようその晩に、私とそうして葉末さんとは、結婚をしたのでございますよ、さようさよう真似事のな。それをしないと大財産が、琢磨氏と葉末さんに行きませんので。……話といえばまずザッと、こんな次第でございます。――さあその後あのお二人、琢磨氏と葉

末さんとは、どんなくらしをしているやら、参ったこともありませんので、とんと一向存じませんが、琢磨氏は学者で人格者、恐らく独身で書斎に籠もり、その西洋の学問なるものを、勉強していることでございましょう。ええとそうして葉末さんは、事実琢磨氏を愛していたので、西洋の言葉でいいますと――これは琢磨氏に聞いたのですが、何んとかいったっけ、プラトニック・ラヴか――心ばかりの恋をささげ、肉体は依然として処女のままで、奉仕していることでございましょう。……いや、何んにしてもあの晩は、私にとって面白かった晩で、剣俠になったのでございますから

な。アッハッハッ、思い出になります」

底本：「怪しの館　短編」国枝史郎伝奇文庫28、講談社
1976（昭和51）年11月12日第1刷発行
初出：「サンデー毎日」
1927（昭和2）年6月15日号
入力：阿和泉拓
校正：多羅尾伴内
2004年11月24日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。